

# 複言語環境で育つ年少者の言語教育に必要な教育条件と環境 —日本語とロシア語のルーツを持つ子どもを事例に—

チモシェンコ ナターリア\*

## Educational environment and conditions necessary for the children language education in a plurilingual society The case study of children with Russian and Japanese roots

TIMOSHENKO Natalia

### Abstract

The purpose of this paper is to analyze the role of the adults in the creation of the efficient environment and necessary conditions for children, who live in plurilingual society, in order to develop the effective educational process. This study presents the results of the interviews held with twenty nine adults, who are involved in the education of children. The research found out that there are three conditions and three main relevant types of environment that influence the effectiveness of the language learning. Additionally, the study describes the problems that arise in the process of these environments' creation.

Key words: plurilingual society, adults, learning environment, children, education conditions

### 1. はじめに

グローバル化が進むにつれ、国境を越えて移動する人々が増えるとともに、国際結婚の数も増えている。その結果、子どもが生まれた時から2つ以上の言語とルーツを持つことが珍しくなくなり、このような複言語環境で育った子どもにどのような言語教育を行うのが効果的かという課題が顕在化してきた。そのため、現在、複言語環境で育った子どもの教育、JSL、JFL、JHL<sup>1</sup>などに関して様々な研究が行われている（川上 2006、バトラー 後藤2008、など）。

法務省によると、2013年に在日する外国人の数は206万6,445人であった。その中で、子ども（19歳以下）は26万4,631人にのぼる。ただし、日本国籍、または二重国籍を持っている日本人と外国人の間に生まれた子どもは外国人登録の統計に反映されていない。

特に、ロシア語とロシアルーツを持つ子どもの人数は明確になっていない。なぜならば、このような子どもの親は必ずしもロシア人であるわけではなく、ウクライナ人、ベラルーシ人、アルメニア人、モルドバ人など、いわゆる旧ソ連の出身である親も含まれているからである。彼らは幼いころから2つの言語（例えば、ロシア語とウクライナ語、ロシア語とモルドバ語、など）を同時に習得していたが、自分の子どもにロシア語を伝えようとしているので、その子どもはロシア語のルーツを持っていると考えることができる。

中島（2013）によると、複言語環境で育った子どもは学習動機が低下し、その結果、語学力のアンバランスさが現れることがよくある。具体的には、聞く力は最も発達するが、これに対して話す力、読み書きの力は極度

---

キーワード：複言語環境、年少者、学習環境、大人、教育条件

\*平成25年度生 人間発達科学専攻

に低くなる。また、子どもはたとえ1つの言語をしっかり覚えても（これは基本的に環境が使っている言語になる）、他の言語を忘れる、または日常生活での口頭レベルでしか使えなくなるということもある。

日本語とロシア語の環境で生まれ育った子どもに2つの言語を同等に身につけさせるのは非常に困難であるということが明確になったため、最近このテーマに関連する研究の数が増えてきた（バソヴァ 2012、Казакевич 2013、Takeda 2013、など）。更に、2000年から「日本ロシア語教育研究会」、また2012年から「子どもの日露言語バイリンガル学会」が発足した。今後も日露バイリンガル教育の発達の必要性に応じて多数の研究が期待されており、本研究もその1つに位置付けることができる。

## 2. 目的、方法

### 2.1. 研究目的

本研究では、日本国内で複言語環境下（日本語とロシア語、という2つの言語）に育った子どもに対する言語教育を研究の対象にする。効果的な教育法として、学習者の学習環境を整えることが重要であると考え、現代社会でより効果的に活動するために学習者には様々な能力の育成のためにどのような環境が必要なのか、また環境作りのために子どもの周囲にいる大人に何ができるのか、そして教育にはどのような条件が必要なのかについて考察する。本稿では効果的な言語教育に必要な条件と環境を明確にするとともに、それらの問題点についても検討したい。

### 2.2. 用語の定義

ここで、本稿で使用する用語の定義を明確にしておきたい。まず、「複言語環境」とは、個人の言語体験に着目し、普段から日常生活で2つ以上の言語を使っている個人の環境をさす（西山 2010）。

また、「年少者」とは、本研究ではVygotskiy (2005) が指摘する「7歳と13歳の危機期間の間にいる子ども」と定義する。というのは、この年齢は子どもの安定期間の「過渡年齢」であり、生活の価値観が形成される時期だからである。

### 2.3. 方法

本研究では仮説を立て、その妥当性を検証するための分析をする仮説検証型の研究にした。日本国内で日本語とロシア語の複言語環境で育った年少者向けの言語教育を対象にし、「質的データ」を収集・分析する「質的方法」をとった。先行研究を踏まえ、半構造化面接法（インタビュー）により調査を実施し、データを収集・分析を行った。

#### 2.3.1. 調査対象者

調査対象者は、複言語環境で育った年少者の保護者や教師とした。今回は調査の対象者に対して2つの条件を当てた。

- ① 調査対象の保護者の子どもは生まれた時から複言語環境で育っている人であること。そして、対象者は自分の子どもに日本語とロシア語の能力育成を目指していること。なぜならば、このような保護者が自分の子どもには2つの言語を促すために様々な情報を集め、これからの育ち方について考え、自分なりの唯一なストラテジーを持っているからである。彼らの意識やストラテジーについて考察することは本研究の重要な課題の一つである。
- ② 調査対象の教師は日本語とロシア語の環境で育った年少者が持つ言語に対して知識を持つ人であること。  
子どもの母語、または母国語、または環境が使っている言語が年少者の日本語のレベルに対して影響を与えているという結果が確認されている<sup>2</sup>ため、年少者に言語を教える教師は効果的な教育を行うために、年少者が持つ言語に対して知識を持ち、この言語を考慮して教育を行う必要がある。

2014年2月から7月にかけて24人の保護者<sup>3</sup>と5人の教師<sup>4</sup>に対して半構造化面接を行った。

### 3. 結果

#### 3.1. 条件

データ分析の結果、年少者向けの言語教育の効果に対して影響を与えている条件を3つ強調することができる。それは、①外部条件、②モチベーションのレベル、③刺激や意義の存在、である。以下、各条件について詳細に記述する。

##### 3.1.1. 外部条件

年少者の外部条件は相互に関係しつつ、子どもに対し、影響を与えている。本研究では外部条件を「人」と「社会」という2つのカテゴリーに分けた。

表1 外部条件のカテゴリー

人		社会	
保護者	子どもが生まれてから、子どもにとって最も近い存在である。保護者の経済力・期待などが子どもの言語習得環境に影響を及ぼす。更に、保護者が持つアイデンティティには曖昧さがあるか否か、母国に対して誇りを持つか否か、ロシア語を大事にしているか否か、なども子どもの教育に対して極めて大きな役割を果たしている。	学 校	学校が取る態度により、子どもには自分のルーツに関して恥または誇りが生まれる。学校は子どもの言語能力のみではなく、アイデンティティの育成とも繋がる役割を果たしている。
教 師	教師は、子どもの成長、能力の形成に対して大きな影響を与えている。従って、教師は子どもの教育、子どもの心理、子どもが持つ言語などについて知識を持つべきである。	社 会	1) 言語政策。 日本語以外の言語の社会的ステータスは言語政策と密接に繋がっている。様々な言語の多様性や価値などを認めた社会では人種に基づいた差別的な態度が少なくなっている。 2) マスメディア。 子どもの言語取得に対して影響を与えている。例えば、日本では最近ロシアとウクライナ間の関係悪化についてニュースや番組が流れている。年少者は詳しく理解できていないが、戦争、残虐行為、殺人などについて聞くと、怖くなり、聞いた情報を誤解してしまう。ロシアには戦争がないのに、「ロシアには行きたくない。殺されるかも」という子どももいる。
友 達	友達言語教育の効果に大きな影響を与えている。子どもが持つ言語のステータスは子どものアイデンティティの形成、子どもの自信や言語学習への興味・関心、動機付け、要求水準などと密接に繋がっている。		

##### 3.1.2. モチベーションのレベル

「言語学習は個人の興味関心や必要性に動機付けられた個人的な活動」(石井 2006)であるので、年少者には言語習得へのモチベーションや興味関心の存在が非常に重要である。調査により、年少者のロシア語習得へのモチベーションの低下に対して影響を与える要因として以下の6点が明らかになった。

第一は、子どもが習得する言語を使う環境がないことである。例えば、子どもがロシア語系の国を訪問しないこと、または日本ではロシア語を使うチャンスはあまりないことなどがあげられる。

第二は、言語を親に勉強させられていることである。例えば、子どもに日常生活でロシア語を使うチャンスは殆どない、親が子どものロシア語学習環境をあまり作ってあげないのにも関わらず、子どもをロシア語の学校へ通わせたりすると、子どもはロシア語教育に対して抵抗を持つことがある。

第三には、読み書きの学習があげられる。子どもにとって言語は家庭内でのコミュニケーションのツールであるが、認知に対して大きな負担を与える読み書きの学習が始まるとロシア語の習得に対して興味を失う。

第四は、言語の社会的ステータスである。親の意見によると、日本ではステータスが高い言語として英語しか考えられていないようである。たとえ、子どもは日本語以外にロシア語ができて、子どもが所属している子

もの社会でロシア語は人気がない。これにより子どもにはアイデンティティの問題が表れる可能性がある。例えば、「どうして私だけ家に帰ったら、ロシア語を勉強しなくちゃいけないの」という子どももいる。

第五は、子どもの周囲にいる人から出てくる差別的な態度である。調査の対象者の24人の内、5人の子どもは差別的な態度に直面したことがあると述べた。その内、2人の子どもは教師から受けたものであった。ただし、外国人が多く住んでいる地域、または2言語環境で育った子どもが多い学校にはこのような問題があまりないことが分かった。

第六は、遊ぶ時間が少なくなっていることである。学校での授業の時間が増えれば増えるほど、子どもの遊ぶ時間が減らされる。殆どの子どもは日本学校以外にスポーツ、英語のレッスン、様々な塾などへも通っているが、その他にモノリンガルの子と違って、ロシア語も勉強するので、子どもの生活は勉強ばかりになる。

### 3.1.3. 刺激や動機付けの存在

湯川 (2006) によると、「母語保持・伸張が難しいのは、一言で言えば、その意義が子どもにみにくいということである」が、筆者は調査のデータを分析した結果、子どもがロシア語を勉強する最も大きな刺激や意義について次のような要因が明らかになった。

第一には、親戚とのロシア語でのコミュニケーションの必要性である。例えば、親、祖父母、兄弟などとロシア語でしか対話できなければ、子どもがどんなに読み書きの学習を嫌がっても、言語習得の必要性を認識することになるだろう。

第二は、子どもが興味を持っている物事について知ったり調べたりするためにロシア語を使う必要性があることである。例としては、次の①から④のようなことがあげられる。

- ①日本でロシアより遅れて上映されている映画を見るために、それをYouTubeでロシア語で見ること。
- ②子どもが好きな主人公について日本語だけではなく、ロシア語でも読んでもらいたい親はロシア語で書いた本を子どもにあたえる。
- ③子どもは好きなアニメをロシア語でも見ることが好きである (例：宮崎駿、ディズニーなど)。
- ④子どもが勉強していることに関わるイベントに参加すること。また、子どもをロシアの有名人に紹介するような活動を行うこと。この場合、子どもには言語活動能力のみではなく、ロシア文化、ロシア人の考え方、ロシアの事情、子どものやることに関する専門知識が広がり、ロシア語のステータスも上がる (例：バレエをやっている子どもの母親は「ロシアのバレエ団が来日する時、必ず自分の子どもをコンサートへ連れて行き、娘たちがバレリーナと話せるチャンスを作るようにする。または、むすめたちがこのようなイベントに通訳ボランティアとして参加することもある」と述べた。また、市内案内の仕事をする時、自分の子どもを連れて行く保護者もいる。)

第三は、親の社会的立場である。筆者が実施した調査では24人の保護者のうち10人は教師として勤めている、または高学歴を持っている人である。殆どの場合、彼らの子どもは他の子どもよりロシア語を勉強する責任、必要性がよく分かっているようである。

第四は、周囲にいる人が子どもの言語学習の努力を奨励してあげることである。子どもには自発的動機付けというよりは外発的動機付けのほうが強いため、子どもに学習を奨励することはとても重要である。例えば、教師が子どもに「授業でクラスメートにロシア語での挨拶を教えること」、または「クラスメートに『大きなかぶ』<sup>5</sup>という本をロシア語で読んであげること」をお願いしてすることなどである。

年少者の外部条件、刺激や意義の存在、モチベーションのレベルという3つの教育の条件は密接に繋がっており、お互いに影響を与え、子ども教育においては非常に重要な役割を果たしていると考えられる。この条件に基づいて教育の環境を作ることも言語教育の効果に影響を与えよう。

### 3.2. 教育環境

大人は自分で言語を最も効果的に学習できる教育環境を作ることができるが、年少者の場合は、周囲の人間が教育環境を作るしかない。調査では子どもにロシア語を伝えるために大人はどのような教育環境を作っているか、または作ろうとしているか、ということについて調べた。

大人が子どもに教育する時、子どもの五感に訴えるものとの接触が重要である。それは、彼らの視野と知識を広げ、興味を持続させ、疑問を喚起し、考える力を伸ばすことができるからである。以下に、本研究では言語教育に必要な環境と、この環境を作る過程で現れた問題点について記述する。

(1) コミュニケーション環境 (ロシア語でコミュニケーションができる教育環境)

この環境を作るためには、親の役割が最も重要だと考える。具体的に言えば、次の①から④のような点があげられる。

- ①まず、彼らは自分子どもに対してロシア語しか使わないようにする。そして、自分の行動、話し方などを例にして子どもにロシア語・ロシア文化を身につけさせるようにする。
- ②また、子どもをロシア語系の国へなるべくよく連れて行くことにする。または、子どもをロシアへ行かせられない場合、ロシアから親戚 (特に祖母) を招待する人がいる。このことは、子どもにはロシア語習得の必要性やモチベーションを向上する大きな刺激になる。
- ③そして、日本国内でも子どもがロシア語が使える機会を増やすようにする。ロシア語圏のコミュニティーへ行かせたり、ロシア語圏の子どもと遊ぶ機会を増やしたりする。
- ④更に、ロシアに因んだイベント、展覧会などに参加させる。ロシアの文化、行事に因んだイベントを作る保護者は少なくないと分かった。年少者にとってこのようなイベントは娯楽、関心の刺激になるため大事である。なぜならば、「子どもにとってロシア語の勉強が丸暗記、自動的な能力の訓練にならないように、遊びのような教え方をすることが重要」(Takeda E. 2013) であり、子どもにとって楽しく、精神的に満足させられる活動は何より学習をする動機になるからである。

ただし、調査から分かった点は、この「コミュニケーション環境」を作るのは容易ではないことである。明らかになった問題点を3点記述する。

第一に、ロシア語ができない親がいれば、家族の皆は集まると、圧倒的に日本語を使うようになる。従って、子どものロシア語の力が伸びにくくなる。一方、1人に1つの言語の場合、ロシア語ができない親はコミュニケーションには参加できなくなるので、家庭内関係が崩れる可能性がある。

第二に、ロシア語圏の国へ子どもを連れて行くために、親には経済負担が大きい。このため、数年間ロシア語圏の国へいけない子どもが非常に多いという結果が出た。

第三に、日本国内でロシア語が話せる環境を作ることは非常に難しいということもわかった。なぜならば、同じ年齢の子どもが近くに住み、特に同じ学校へ通うことが非常に珍しいことだからである。従って、ロシア語圏の子どもが出会う時、共通言語として日本語を使う傾向が現れた。

(2) 教育環境 (ロシア語の読み書きなどを教えるための教育環境)

中島 (2013) によると、複言語環境で育った年少者には聞く力が最も発達するが、これに対して話す力、読み書きの力が極度に低くなることがよくある。言語は子どもの認知発達と密接に繋がっているため、子どもの語学力のバランスを取るために、ロシア語の読み書き、言語構造知識、言語行動などを教えることは不可欠である。

ただし、「教育環境」を作ることに問題点があることが明らかになった。第一に、日本に存在しているロシア語の学校に関する公式的な情報はないということである。または、情報があっても、一致しない。“Russian event in Japan”によると、日本国内でロシア語を教えている教育機関が13箇所ある<sup>6)</sup>が、筆者が調べた限りでは、このサイトに紹介されていない機関を3箇所見つけた。更に、個人レッスン、またはスカイプで授業を行う教師もいる。

第二に、公式的な情報がないということは、現在日本にいるロシアの保護者にとってロシア語の学校、または教師を見つけにくいということである。従って、日本で子どもにロシア語を教えている教師や学校や親の間には連携がないということも大きな問題として考えられる。

(3) メディア環境 (子どもがロシア語とロシアの文化を習得できる教育環境)

筆者はメディア環境としてテレビや動画のみではなく、書物も考えている。まず、既に述べたように(3.1.1. 外部条件)、「メディア環境」が子どものロシア語学習の刺激や意義と繋がっているため、言語能力の発達に対してプラスの影響を与えていると考えられる。

また、メディア環境によって年少者は聞き取りや発音の練習、言語のリズムを身につけることができる。その

ために、保護者は子どもと一緒に車に乗る時、CDで音楽を聞かせる、またはロシアで有名なアニメの歌を聞きながら一緒に歌うことがよくある。また、朗読の録音も聞かせ、または目的地まで長い時間がかかる時、車の中でDVDを見せる保護者も少なくない。

そして、メディアによって、年少者はロシア人の考え方を身につけ、ロシアの文化を習得する。例えば、保護者は子どもに諺を覚えさせ意味を考えさせる、安全性のため悪口（禁句として）を覚えさせる、昔話を読む、または朗読の録音を聞かせる。

ただし、「メディア環境」を作ることに問題点がないわけではないことが分かった。最も大きな問題として考えられるのは、保護者がどんなアニメ、どんな番組を見せれば子どもの言語能力に対してだけでなく、彼らのロシア語に対する興味を促すことができるかが明確ではないことである。従って、この点については試行錯誤を重ねながら行わざるを得ない。

#### 4. 考察と今後の課題

日本語とロシア語の複言語環境で育った年少者の保護者とロシア語の教師に対して行った調査から、効果的な教育には子どもにある「人」と「社会」を含めた外部条件、そして刺激や意義の存在、またモチベーションのレベルという条件が最も重要な役割を果たしていることが分かった。更に、この条件を基にし、年少者の周囲にいる大人は3つの教育環境を作ることができるという結果が出た。ただし、経済負担、政府が行う政策やメディアの影響、保護者や教師の専門知識不足などのような問題が明らかになったため、強調した条件と教育環境に適合した教育を行うのは困難であるということも分かった。今後は年少者の外部条件、動機付け（刺激や意義）と3つの教育環境のつながりについて考察したい。

今回の調査ではロシア語の教師に対して条件を当てたが、実際に子ども教育などについて専門知識は持っているが、日本語ができない教師も少なくないと分かった。一方、子どもの言語教育に関する専門知識を持っていない教師もいる。このような教師の経験や考え方も興味深いと考え、彼らの意識などについても調べたほうが言語教育の効果に関してよりよく理解できると考える。

保護者・教師・学校・社会は複言語環境で育った子どもに対し効果的な言語教育を行う上で、大きな役割を果たす。そのため、彼らの連携による教育を目指すことが重要であると考え。この連携を作る方法について検討することを今後の1つの課題として考えてみたい。

まずは保護者に焦点を当て、保護者が彼らが子どもにとって学習支援者でもあるということ意識しているのか、意識している場合、どこに一番注意しているのかを検討し、年少者のロシア語の学びに対して保護者と支援者という双方の視点から探りたい。

調査の各対象者にはそれぞれに個人的な独自の経験や考え方、また子どもの扱い方や教え方などがあり、この貴重な情報を収集し求めることは不可欠であると考え。2014年2月から7月にかけて行った調査には29人の対象者の参加を得ることができた。今後はさらに得た情報を分析・解釈し、ロシアコミュニティに対する知見を得たい。

#### 【註】

1 JSL – Japan Second Language, JFL – Japan Foreign Language, JHL – Japan Heritage Language

2 第1に、筆者はすでに修士課程で、ウズベク語の文法、また発音は日本語の文法と発音に似ているため、ロシア語系の年少者に比べたら、ウズベク語を母語とする学習者が日本語の文法、口頭日本語をより身に付けやすい、ということを示した（チモシェンコ2013）。第2に、フランスにいる日本語を母語として持つ年少者は、日本語を外国語として勉強する年少者と日本語の学習において共通の問題に直面している。それは漢字に馴染みがないということである。年少者は母語が日本語であっても、International School（国際学校）で日本語を勉強しても、書きについては日常的に使う言語の影響を受ける

3 24人の内1人だけは父親であった

4 東京都で16人の保護者と教師1人、富山市で4人の保護者と教師1人、四国の西条市で3人の保護者と教師1人、京都で1人の保護

者と教師 2人

5 日本人の子どもがよく内容を知っている書物

6 教育機関の所在地は以下の通り：東京(6)、埼玉(1)、川崎(1)、大阪(2)、横浜(2)、富山(1)。Russian event in Japan <<http://www.rus-jp.com>>アクセス2014年08月3日

### 【参考文献一覧】

バソヴァ・オリガ (2012) 「日本におけるロシア語を継承語とする子どもの保護者に対するロシア語教育に関する意識調査」『ロシア語教育研究』、3、pp.1-24.

バトラー後藤裕子 (2008) 『多言語社会の言語文化教育』くろしお出版

法務省<[http://www.moj.go.jp/housei/toukei/toukei\\_ichiran\\_touroku.html](http://www.moj.go.jp/housei/toukei/toukei_ichiran_touroku.html)>アクセス2014年08月3日

石井恵理子 (2006) 「年少者日本語教育の構築に向けて—子どもの成長を支える言語教育として—」『日本語教育』、128、pp.3-12.

川上郁雄 (2006) 『「移動する子どもたち」と日本語教育—日本語を母語としない子どもへのことばの教育を考える—』明石書店

Казакевич Маргарита (2013) Русский язык в русскоязычной диаспоре, 『ロシア語教育研究』、4、pp.75-96.

中島和子 (2013) 「日ロ・バイリンガル育成のための継承ロシア語の保持・伸長—心理的要因と社会的要因を中心に—」『ロシア語教育研究』、4、pp.1-17.

西山教行 (2010) 「複言語・複文化主義の形成と展開」細川英雄・西山教行編『複言語・複文化主義とは何か』、p.22、くろしお出版

Takeda E.V. (2013) Mama, let's play Russian: My experience in teaching bilingual children ages 4-10 in Japan, *Multilingualism and Intercultural Communication: Challenges of the XXI Century*, Prague, pp.99-115.

チモシェンコ・ナターリア (2013) 『海外の年少者に対する日本語・日本文化教育—ロシア日本語教育を中心として—』(東京女子大学、修士論文、未公開)

Vigotskiy, L. (2005) *Psibologiya razvitiya rebyonka* (子どもの発達心理) Moskva, Smisl, Eksmo.

湯川笑子 (2006) 「年少者教育における母語保持・伸長を考える」『日本語教育』、128、pp.13-23.